

★努力を褒める★

アメリカのある州にある小学校において、心理学者キャメル・ドウエック教授は、次のような実験を行いました。

児童を2つのグループに分け、それぞれ同じパズルの課題を与えました。そのテスト終了後、一方の児童には「頭がいいわね」と、彼らの「賢さ・頭のよさ」を褒め、もう一方のグループには「一所懸命頑張ったね」と、取り組む姿勢や努力を褒めたのでした。

次に、もう一つのテストをする前に、「さっきより難しいテストと簡単なテストはどちらに挑戦したい？」と質問させました。その結果、「努力」を褒められた児童の9割が難しいテストをやってみたいと答えたのでした。

一方の「賢さ」を褒められた児童は、ほとんどが優しいテストを選びました。なぜ、易しい問題を選択したのでしょうか？

「賢い」児童は次も「賢い」という評価を「受けたい」、「失いたくない」と、間違いを恐れ、リスクを回避したいからだと教授は説明しています。子どもたちが生涯にわたって学び続けるためにも「努力を褒める」ことを心がけていきましょう。

《質問》あなたは「努力」を褒めていますか？

◎ 子どもたちの一番近い場所にいるのが親です。親の言葉は「聞いていないようで聞いています。」努力の大切さをきちんと教えていきましょう。

上記の話に出てきたキャメル教授は下記のような言葉も残しています。

生徒の「賢さ」をほめることの問題は、教育というものの心理学的なりアリティを誤った形で示すことにある。それは、「間違いから学ぶ」という最も有益な学習活動を避けさせてしまう。

日本の教育の改善点がまさにこの「間違いから学ぶ」ということです。「転ばぬ先の杖」という言葉が示すとおり、どうしても先回りして転ばないようにしてきました。しかし、教育の転換はまさにこのことだと思えます。児童生徒に「失敗オッケー」「成功の反対は何もしないこと！」などの言葉や言葉の意

味をどんどん伝えていきたいと考えます。それを踏まえて、下の文章を読んでみてください。

★私の尊敬する先生がある話をしてくれて、とても納得させられた話★

昔、私が尊敬する経営者に、このようなことを質問したことがあります。

私：『お子さんを育てるにあたっての基本方針はどのようにされていますか？』

経営者：「学校で一番努力しろ！そして、結果はピリでいい、とよく言いますね！」

皆さん、いかがだったでしょうか？大きくなずいていただければ嬉しいです。こんな教育を目指しています。